［2023年度　入選］

「おかん」とは何か
―地域文化・メディア・フェミニズムの共振によって生み出された母親像―

遠藤　由惟

目次

第1章　はじめに
第2章　母親と「おかん」の歴史
第3章　メディアが表象する「おかん」像
第4章　おかんの揺らぎ
第5章　おかんと関西の文化「型くずし」
第6章　人々が語る「おかん」像
第7章　おわりに

第1章　はじめに

1-1　問題の所在

母親のあり方や役割は、歴史的に変化してきた。そして、家族社会学における先行研究では、日本社会における戦前のイエ制度や戦後の核家族化、女性の職業進出というような歴史的背景の視点から、そのような母親像の変遷を明らかにしているものが多くみられる。

しかし、日本社会の中では、地域によっても母親像に違いがみられるのではないだろうか。たとえば、関西地方を中心に「おかん」という言葉が存在する。「おかん」という言葉から一般的な母親とは異なる独特な印象を持つ人は多いのではないだろうか。筆者自身、大学進学とともに関西で暮らすようになった際、関西地域の母親と子どもの会話が漫才を見ているようだったことや、他人の子どもに対しても自分の子どものように体調や食事を心配している印象を受け、関西の母親＝「おかん」とはどのような存在なのかに興味を持ったのが本研究の始まりである。

これらのことから、「おかん」とは、これまで語られてきた母親像とは異なる、オルタナティブな母親像を構築するものではないかと考えられる。そうだとすれば、「おかん」は単なる方言という枠に留まるものではなく、母親像を組み替える可能性を持つ社会的な存在であり、社会学的な分析に値する対象とみなすことができるだろう。

1-2　研究の問い・方法

では、「おかん」とは何か。これまで語られてきた母親像とは異なるイメージを抱くのはなぜか。本論文ではその理由を、メディアや地域文化との関連から解き明かしたい。なぜなら、人々が関西地域の母親に対して抱くイメージには、メディアによる関西地域の母親の表象が深く関係しているのではないかと考えられるからである。つまり、メディアは関西の母親を独自の存在として表象しているのではないだろうか。そして、現実の関西の母

親たちはメディアが表象しているステレオタイプの「おかん」によって役割を取得し、役割演技（A.ゴッフマン 1974）をしているのではないか。以上のような仮説をもとに、本論文では、関西の家族や母親を描いたメディアを分析し、関西の母親がメディアにおいてどのように表象されているのかを明らかにする。また、関西地方に住む母親へのインタビューを通して現実の母親が「母親」や「おかん」をどのように捉えているのかの実態を分析する。

これらを通して、母親像を一元化した先行研究とは異なる捉え方が可能になり、母親像はジェンダーや家族をめぐる社会規範だけでなく、地域文化やメディア文化とのかかわりによっても構築されうるという文化社会学的な視点を提示することが本研究の意義である。

第2章　母親と「おかん」の歴史

前章において、「おかん」はこれまで語られてきた母親像とは異なる存在なのではないかと述べた。そこで本章では、先行研究で述べられていた母親像と「おかん」という言葉の歴史やその言葉がもつイメージを時代ごとに比較する。

2-1　明治時代に発明された「母親」という役割

千田有紀（2013）は、「母親」は明治時代に入ってから作られた新しい役割であると指摘している。そもそも日本語の「家族」という言葉自体が、明治になってからの翻訳語であり、とくに、日本における良妻賢母規範は明治時代に入って作られた発明品だという（千田 2013：44）。良妻賢母とは、夫に対して良い妻であり、子どもにとって良い母親であることを意味する。

近代家族以前において、「家族」はそれほど重要な単位ではなく、年齢や性別に従って集団を作り、農作業などを共同で行っていた。結婚も家族の問題ではなく、共同体の政治的な結びつきの問題であり、幕府や藩によって統制されていた。つまり、明治以前には、私的が領域と公的な領域が未分化な状態だった。また女性に期待されていたのは実はよい子どもを産むことだけであり、育てることは期待されておらず、むしろ男の子のしつけなどは、父親に任されていたといわれている。そのため、江戸時代においては貧困による原因以外でも間引きや堕胎が行われていた（千田 2013：32,43）。

しかし、乳幼児が将来の「国民」の予備軍であることが意識され始めることによって、子どもに対する意識が変わっていった。明治政府は堕胎を禁止するなど、子どもに大きな関心が寄せられるようになり、とくに母親が子どもへの世話をすることが規範化されていき、乳母による育児は廃止され、母乳による育児、そして母親による気遣いが、子どもには不可欠なものと考えられるようになった。1870年代には賢母良妻と翻訳語として作りだされ、1890年代に良妻賢母という言葉に落ち着いた。今田絵里香（2019）によると、実際に明治から昭和戦前期の中流層以上の少女には、将来的に良妻賢母になることが求められ、現実には多くの少女は良妻賢母になったという。そしてこのような「良妻賢母」規範は、母になる女性にも教育が必要であるという、女子教育を推進する際の根拠として利用された。平塚らいてうは、女は母になることによって「社会的な、国家的な存在者となる」と主張した（千田 2013：43-44）。

以上のことから、「家族」や「母親」はもともと日本にあったものではなく、明治時代に外

国から輸入され作られた言葉であることが分かる。そして、母親に子どもの育児や母性を期待する規範やイデオロギーは、当時の日本国家が理想としているイメージと重ね合わせながら語られてきたといえる。

2-2 「おかん」の語源 （江戸時代～戦前まで）

松本修（2010）によると、「おかん」は1843年、大坂の心斎橋通博労町で出版された雑俳集『机の塵』（1843）に収録された一句の中に「おかん」が初めて出現しているという。「おかん」は、「中流以下の町家などで多く用いる語」と語釈されている。また、前田勇編『近世上方語辞典』（1964）においても「町屋で、中流以下の用語」と説明されており、やはり使用階層は低いものと説明されていた。また、どちらも幼い娘が母親を呼んでいる発言で登場している。しかし、「おかん」という言葉が登場している文章を読むと、着物や乳母が登場していることから、説明文とは異なる、むしろ金銭的にかなり余裕のある身分なのではないかと松本は指摘している（松本 2010：186-188）。

これらのことから、「おかん」は幕末の大坂には存在しており、「おかん」はもともと生活に余裕のある大坂の町人の子どもが、母親に対してなす、敬意にあふれた呼称だったにちがいないと松本は述べている（松本 2010：189）。

明治以降の大正、昭和初期にかけての文献では、「おかん」は、母親への直接の呼称としても、第三者として話題にする場合にも、さらには母親自身の自称にも用いられていた。しかし、江戸時代とは異なり、明治以降は低い階層の貧しい庶民たちによって使用されていたことがわかった。

戦前の時代では、富める者だけでなく、もっとも貧しき民にあっても、少なくとも女性の間では「お父ちゃん」「お母ちゃん」の呼称に移行しつつあったのである。

明治期の日本を振り返ると、2-1で述べたように「家族」や「母親」という言葉が生まれ、良妻賢母思想を根拠とした女子教育が進められていた時代であった。それに加え、平塚らいてうや与謝野晶子などが活躍した第一波フェミニズムが日本で起こっていた時期でもある。第一波フェミニズムは、近代社会ができあがるときに、女性のおかれようとする場所を問いながら新しい場所を探そうとする運動であったと千田は言及している（千田 2013：202）。また、どんなに貧しくても自分たちの家族が一番である、家族はみな仲がいいはずだという「家庭」規範は、大正期には都市の中産階級に新しい家族のイメージとして積極的に受け入れられていったという（千田 2013：45）。19世紀末には、啓蒙思想家の福沢諭吉たちが発行した『家庭叢談』などをはじめとして、『家庭之友』や『家庭雑誌』など、「家庭」という言葉がついた雑誌が発行され、「家庭」というイメージが日本の知識人をとらえ、この言葉を広く大流行させた時期でもあった。

これらのことから、家庭イデオロギーや良妻賢母規範とした教育を受けたことによって、一定の階層以上の関西の女性の間では、「おかん」ではなく、「お母ちゃん」という新しい立場が見つかり、それに応じて呼び方も変化していった可能性が高いのではないかと考える。

一方で、「おとん」という言葉は、どの辞書にも出てきていない。大阪方言をていねいに拾い上げた牧村史陽編『大阪方言事典』（1955）においてすらも、「おとん」という言葉は欠けている。このことから、「おとん」は、近年まで大阪に存在していなかったのかもしれないと松本は指摘している（松本 2010：186）。

以上のことから、「おかん」という言葉は、「家族」や「母親」の概念が入ってきた明治以前から存在していたと言える。また、「おとん」という男性の存在を意味する言葉と対をなすものではないということもわかった。つまり、「おかん」という言葉は、語源において「母親」とは異なる要素をもった存在であるといえる。一方で、明治時代に「母親」という新たな役割が生まれて以降、女性の間での呼び方が「おかん」から「お母ちゃん」に変化したと推論すると、「おかん」と「母親」には互換性があるということも事実である。

2-3　第一波「おかん」イズム―戦後社会の「モデル」（第二次世界大戦後）

前節で述べたように、「おかん」という言葉は江戸時代から昭和初期にかけて日常会話で使用する頻度が減少していたことがわかった。

一方で、1948年にミヤコ蝶々と南都雄二との「蝶々南都」という夫婦漫才が大流行した。ミヤコ蝶々は「浪速のおかん」として親しまれた。ミヤコ蝶々は東京生まれであるが、幼少期に神戸に移り住み、夫婦漫才で一躍有名になった。コンビは南都雄二が亡くなる1973年まで続き、相方がいなくなってもボケとツッコミを一人でこなし、長年、上方漫才と喜劇界とを支えた。ミヤコ蝶々が「浪速のおかん」という愛称で親しまれていた明確な理由が記されている資料は見つからなかったが、ミヤコ蝶々の人生をまとめた書籍の概要には、「一人の女性として、持ち前の才知で生き抜いた波乱の人生。その中から生み出された名語録など」（佐村 2001）と説明されている。また、NHKの人物録では、「腎盂炎が持病の蝶々だが、持ち前の明るさで、それぞれの舞台を一生懸命に務めてきた」（NHK 2023：第1段落）と紹介されている。

これらのことから、戦後まもなくの「おかん」はミヤコ蝶々という有名人がモデルになっていたのではないかと考える。そして、その「おかん」像というのはミヤコ蝶々の紹介文からわかるように、波乱の人生をも持ち前の明るさで辛抱強く生き抜くイメージだったのではないかと推論する。

戦後まもなくの日本を振り返ると、2-2で述べた「家庭」規範において、第二次世界大戦後は、明るく民主的な「家庭」を作っていくことこそが、日本社会が平和に向かって歩んでいくことであると考えられていたと千田は述べている（千田 2013：45）。また、落合恵美子（2022）は、1950年の5月号の『主婦の友』という雑誌の表紙に描かれている若い娘たちは、スカート姿で足を投げ出し、あるいはあぐらをかいて山の斜面に座り、奔放なポーズを見せていると言及している。これは、深層に戦前戦中的なものを引き継ぎながらも「戦後娘」が解放感を謳歌した復興期であると落合はいう（落合 2022：301-302）。

以上のことから、戦後における「おかん」は、ミヤコ蝶々からイメージされる、明るく辛抱強く生き抜く女性像であったことわかる。そして、このイメージは戦後日本社会が平和に向かって復興していく時代と関連しているといえるのではないかと考える。

2-4　第二波「おかん」イズム―お笑いの「小道具」（1970年代～ 1980年代）

2-2では昭和初期にかけて女性の間では「おかん」が「お母ちゃん」という呼び名に変化していた一方で、戦後復興期の日本社会では、波乱の人生も明るく生き抜くイメージが強いミヤコ蝶々が「浪速のおかん」として親しまれていたことを2-3で述べた。

そして、二度目の「おかん」ブームが登場するのは、1975年前後である。2-3で述べたミヤ

コ蝶々が担った「おかん」的存在から約20年以上空いている。これは先述した戦後から昭和初期にかけて「おかん」が「お母ちゃん」に変化した要因と似ているのではないかと考える。

落合は、1955年は「主婦の誕生」であったと指摘している。雑誌において、主婦のしぐさや表情といった身体技法、ファッションにもはっきりとした定型ができあがっていると落合は述べている（落合 2022：303）。襟元のネックレスとイヤリング、赤い口紅と細目に剃った眉、セットした髪というファッションであった。身体技法としては、抑えたほほ笑みと身振りで気品と自制を演出している。そして、この型はPTAファッションなどとして30年以上もの長きにわたり踏襲し続けていると落合は言及している（落合 2022：303）。また、1960年に行われた国勢調査では、夫婦と未婚の子どもからなる核家族世帯が増加しているといわれ、1963年には「核家族」が一躍、流行語になった。

つまり、明治時代に「母親」が登場したように、1955年頃には「主婦」が誕生し、家族形態も変化した。このことにより、「おかん」という存在が「主婦」の勢いにのみこまれ下火になったのではないかと考える。

そして、戦後ミヤコ蝶々が有名になってから約30年後の1975年前後に大阪の中高生たちの間で「おかん」という言葉がブームになっていたという話にもとづき、松本（2010）は当時のメディアにおける「おかん」という言葉の使われ方を調査した。

1972年に放送された、お笑いコンビのコメディNO.1の「教育ママ」というタイトルの漫才には「おかん」という言葉が頻出していた。「おかんじゃないですよ、ママ」と訂正を指図している発言がみられることから、「おかん」は、「ママ」よりもランクの低い言葉として意識され、笑いの材料とされたのである。つまり、「おかん」という言葉はこの当時、大阪のお笑い界で「ギャグ」として用いられていたのである。1974年8月17日に、うめだ花月で演じられた「ジョッキで乾杯」というコメディNO.1の漫才には「おとん」も登場した。これまで久しく欠落していた「おとん」は、これも70年代初頭までに補われ、芸人によって世間に広められたものと考えられるのである。また、『お笑いネットワーク発 漫才の殿堂 島田紳助 松本竜介』のDVDに収録されている1980年8月2日OAの番組「お笑いエース登場」の中の漫才でも「おかん」はごく自然に使われており、観客も明らかにそれを聞き慣れた様子であった。さらに『お笑いネットワーク発 漫才の殿堂 ザ・ぼんち』の1980年6月21日放送分でも「おかん」が現れていた（松本 2010：202-208）。

さらに、1989年にはお笑いコンビのダウンタウンが東京に進出し、ブレイク初期の1989年10月に始まった日本テレビの『ダウンタウンのガキの使いやあらへんで!!』のDVDには、漫才のやりとりのような爆笑のフリートークの中に「おかん」はすでに登場していたという（松本 2010：172-174）。しかし、松本は「おかん」という言葉を使用するのはあくまで「お笑い」の場面だけであったのではないかと指摘している。ダウンタウンの松本人志の家族が出てきた際の映像を見ると、「おかん」という言葉を広めた張本人ですら、実生活では「おかあちゃん」「かあちゃん」と呼んでいた。このことから、実は自分の母親に対しては「おかん」という呼称を用いてこなかったということがわかる。つまり、「おかん」という言葉は、笑いの小道具として使用されていたといえる。一方で、1970年代に「おかん」流行のきっかけを作ったお笑いコンビのコメディNO.1の坂田利夫はインタビューで母親のことは子どもの頃から「おかん」と呼んでいたと答えた。しかし、父親のことはコント内では「おとん」と呼んでいたが、実生活では「お父ちゃん」と呼んでいたという（松本 2010：233-235）。坂田利

夫の事例は、松本人志とは違って実生活においても母親のことを「おかん」と呼んでいたが、「おかん」と「おとん」のセットでは呼んでいないといえる。実際は「おかん・おとん」のセットで呼んでいなかったという点においては、やはりお笑いの小道具として用いられていたといえるだろう。

1970年代から1980年代の日本を振り返ると、第二波のフェミニズム運動が起こっていた時期である。第二次世界大戦後の1960年代以降、フェミニズムは第一波で要求した権利の拡大とともに、ウーマン・リブ運動へと広がっていた。ウーマン・リブとは、女性のために、女性が男性と平等な権利を求め、男性と対等の地位や自分自身で職業や生き方を選べる自由を獲得しようとする社会運動のことである。また、第二波フェミニズムでは、「個人的なことは、政治的である」というスローガンが打ち出された。これは「私的」な領域で起きているから、その問題はたんに個人的なことであって、「政治」や「権力」とは関係ないと考えられがちな傾向に対する批判だった。世界では国連が1975年を「国際婦人年」と決議し、同年にメキシコで国連の第1回世界女性会議が開かれ、日本でも市川房枝らが全国組織の女性団体に呼びかけ「国際婦人年日本大会」を開催している。1985年には、男女雇用機会均等法が成立した。この第二波フェミニズムは、近代社会が完成したあと、女性のおかれている場所を根底から覆そうとする近代社会批判の運動であると千田は述べている（千田 2013：202）。また、1980年代以降の主婦雑誌を見ると、これまでの主婦イメージからの変化が見られると落合は指摘している（落合 2022：323）。1985年になると、服装が独身者と区別がつかなくなり、実の母娘が同じブランドの服を着て1枚の写真におさまるという企画もあったという。これをイメージおける「主婦の崩壊」であると落合は述べている（落合 2022：323-324）。

これらのことから、1970年代にお笑い芸人によって私的な領域であった「おかん」の存在が公的な場で語られるようになったといえる。それは、同じ頃に女性が私的な存在に押し込められてしまっている現状を批判する第二波フェミニズムの運動が行われていた時期と重なっていることがわかった。つまり、お笑いの「ギャグ」として登場した「ママ」とは異なる存在の「おかん」の流行は、固定的なジェンダー観を見直す時代背景と連動していたのではないかと考える。しかし、「おかん」の存在は、あくまで「男性」の芸人を中心にお笑いの「ギャグ」や「小道具」として用いられていたものであり、「おかん」と呼ばれていた当事者の女性たちによる運動ではなかった。それでも、「おかん」というこれまで語られてきた良妻賢母とは異なる母親像を受け入れる態勢が社会にあったことが、第二波「おかん」イズムを支えたのではないか。

2-5　第三波「おかん」イズム―全国化する「おかん」（1980年代以降）

前節から、1970年代頃の上方漫才で「おかん」という言葉が使用され、大阪では「おかん」という言葉がブームになっていたことがわかった。それに引き続き、1980年代後半からも主にダウンタウンが「おかん」という言葉をお笑いの場面において継承していたことがわかる。この節では1980年代以降において「おかん」という言葉がどのように使用されていたかを朝日新聞の記事検索を通して分析する。

1985年から1995年の10年間は母親という意味での「おかん」という言葉は登場しなかった。しかし、1995年から全国版の新聞で「おかん」という言葉が登場した。その最初の記事

となったのは1995年2月1日の阪神・淡路大震災に関する社説である。当時、神戸市東灘区本庄中学校3年生だった男の子の様子を記者が記したものに「気がつくと、甘えて『おかん』と呼んでいた母親を『お母さん』と呼ぶようになっていた」(『朝日新聞』1995.2.1朝刊)という一文があった。この文章から、「おかん」という言葉が大阪に限らず、関西地方の一般人の日常会話で使用されていたことがわかる。さらに、「おかん」という言葉には子どもからの親しみや甘えが含まれていることも読み取れる。

このことから、「おかん」という言葉は、関西地方の子どもたちがお笑い芸人の呼び方を真似したことによって、全国に広まっていったと考えられる。つまり、語源だけでなく、言葉の広まり方に関しても、かつて国や政府によって定義された「母親」とは異なるといえる。

表1 「おかん」に関する朝日新聞の記事件数【1985年～】

年	件数	主な出来事
95年	5件	阪神淡路大震災
96年	3件	
97年	5件	
98年	3件	
99年	8件	
00年	20件	「浪速のおかん」ミヤコ蝶々死去
01年	11件	
02年	14件	
03年	14件	
04年	30件	「おかんの知恵袋」の連載が関西版夕刊でスタート
05年	18件	小説「東京タワー—オカンとボクと、時々、オトン」出版
06年	16件	
07年	18件	
08年	30件	ミヤコ蝶々記念館開館、高校野球児の母親たち
09年	29件	NHK連続テレビ小説「つばさ」放送、絵本「おかん」出版
10年	26件	佐賀県庁通り商店街の看板猫「おかん」
11年	17件	
12年	25件	「働く!!おかん図鑑」発行
13年	17件	
14年	23件	「おかんメール」出版
15年	20件	
16年	22件	「おかんアプリ」誕生
17年	14件	
18年	16件	
19年	17件	
20年	16件	
21年	16件	
22年	10件	「おかん」アート展
23年	10件	

(筆者作成)

澤村美幸（2023）は、多くの関西方言が若者たちに使われるようになってきた理由の一つとして考えられるのは、2000年代からのお笑いブームだと言及している。関西のお笑い番組がテレビなどのマスメディアを通して、全国的に受け入れられるようになったことにより、漫談している芸人たちが使う関西方言が全国の若者を中心に広まったといわれている。

関西の方言が若者を全国に広まったということは、「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」の関西弁の広がりに関する調査データからも読み取ることができる（ことば研究館 2021）。これは、2009年3月時点で20歳から79歳までの男女を対象に、全国73地点925人対象とした調査をした際のデータである。主に小・中学校時代に最も長く住んだ都道府県が、調査時点で住んでいる都道府県と同じ人を「地元出身者」とみなし、この人々の回答を集計した結果である。図1をみると、「おとん」よりも「おかん」の方が多く使用されていることがわかる。また、地域別でみると、近畿地方を中心に、離れるほど使用率が低くなっているといえる。世代別にみると、1970～80年代生まれの人の使用者が多く、他の世代は低いことが読み取れる。これらのことから、もともと近畿地方でも一部で使用されていた「おかん」「おとん」が、近畿地方での使用が増加するとともに、周辺地域へと広がっていると考えることができる。そして、1970～80年代生まれの人々は、2-4で述べたお笑い芸人が「おかん」をネタに使用し始めた時期と重なっているため、マスメディアを通して当時の若者から「おかん」という言葉が全国に広まった様子がデータからも読み取れる。

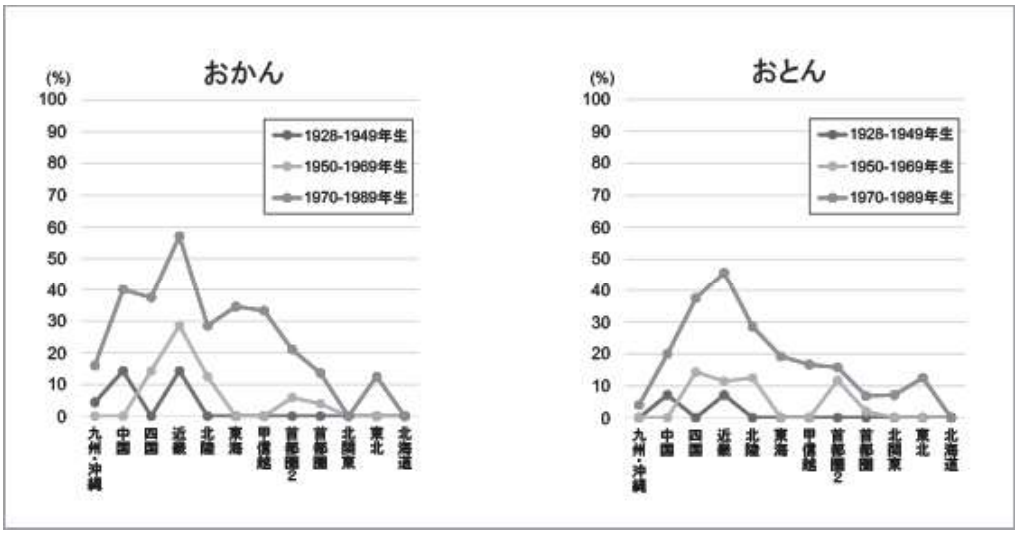

図1　「おかん」と「おとん」の言葉の広がり（ことば研究館：2021）

実際に1997年の朝日新聞の記事には、お笑いコンビのロンドンブーツ1号2号が、東京でおかんネタのトークをしていたことが記されていた。上の表からも、ちょうど2000年から新聞で「おかん」という言葉が使用される件数が顕著に増加していることがわかる。とくに2000年は、2-3で述べた「浪速のおかん」の愛称で親しまれていたミヤコ蝶々が亡くなったことに関する記事が多数みられた。ミヤコ蝶々の告別式では芸能人のほかに、ファンの中高年の女性らがお別れをするために列をつくったと記されていた（『朝日新聞』2000.10.16夕刊）。このことから、ミヤコ蝶々のファンは「おかん」と呼ばれる中高年の女性たち本人から支持されていたことがわかる。ミヤコ蝶々は当時の女性たちの憧れであり、彼女に励まされ、元気づけられていた女性が多かったのではないかと考えられる。

また、松本は現代において、「おかん」という言葉が全国的にポピュラーになったきっかけは、2005年にリリー・フランキーが小説『東京タワー―オカンとボクと、時々、オトン』を出版したことにあると推測している(松本 2010:160)。この小説はミリオンセラーとなり、二度にわたってテレビドラマ化され、さらに映画や芝居にまでなった。「おかん」役を演じたのは、田中裕子、倍賞美津子、樹木希林といった有名な女優だった。その前年の2004年には、関西版の夕刊で「おかんの知恵袋」という生活に役立つヒントを記載したコーナーがスタートしている。このコーナーでは「アイロンがけを省くには」「リモコンの汚れを防ぐには」「古い米、お酒でふっくら」などと書かれた見出しの記事が見られた。この見出しから、「おかん」という言葉には、面倒なことは省いて楽をしたい意識やもったいない精神が付随していることが読み取れる。さらに、これらの知恵は専門家が説明しているものではなく、購読者から募ったものや記者が訪れた関西の横丁のお店で見かけたアイデアといった、身近な人たちの知恵として紹介されているのも特徴なのではないかと考える。

また、2008年には2000年に亡くなったミヤコ蝶々の大阪府にある自宅がミヤコ蝶々記念館として改装され、同年に蝶々の人生を描いた舞台が上演されている。さらに、夏に行われた全国高校野球の記事では、「選手に声援を送るおかんたち」というタイトルの写真と共に高校球児の母親たちが以下のように紹介されていた。

> 夏の甲子園で8日、山形県代表の酒田南が臨んだ。競争の激しい大阪県の野球少年が「甲子園の近道」として集まる同行は、部員51人のうち27人が大阪府出身。甲子園は3年ぶりで、待ちに待ったおかんたちは、わが子の世話焼きに盛り上がる。「一つでも多く勝って、もっと世話焼かせてや」
>
> 右翼手の田中陽介君(3年)の父元さん(48)が1週間、会社を休んだ。大阪市周辺で毎日2時間ある練習を見たり、差し入れを運んだりするためだ。「息子の晴れ舞台やもの。今やらんで、いつやるよ」
>
> 大阪市中央区の宿舎や練習場には、そろいのTシャツを着た母親たちが足しげく訪れる。捕手で4番の西凌太君(3年)の母真由美さん(41)もその一人。練習中の選手に飲み物を用意し、氷水や冷やしたおしぼりを絞って配る。「ようやく世話を焼けるんやもの」と大張り切りだ。(川原千夏子2008:第1段落-第3段落)

実際に高校生たちが母親たちのことを「おかん」と呼んでいたのかは明確にはなっていないが、母親たちはおそろいのTシャツを着るほど仲間意識が強く、熱心に子どもたちのために世話を焼く様子から、「おかん」と表現されたのではないかと考える。父親も子どもに熱心であることが紹介されているが、「おとん」という言い換えはされていない。これらのことから、この頃には「おかん」という言葉が含むイメージは、広く一般的に認識されていたのではないかと考える。2009年に放送されたNHK東京制作の連続テレビ小説『つばさ』では、埼玉県が舞台であるが、10年前に家出した母親に代わって炊事や洗濯、弟の世話など、一切の家事を取り仕切っている主人公の女子大学生つばさは、自らのことを誇らしく「二十歳のオカン」と称していて、学校の友だちからも「おかん」と呼ばれていた。こうして「おかん」という言葉は一躍、日本語の表舞台に飛び出したと松本はいう(松本 2010:161)。このことから、「おかん」という言葉は、関西地方の母親に限らず、その人の性格やイメージを

表す「キャラクター」として使用されるようになったといえるのではないかと考える。実際に、2009年4月28日の朝日新聞に朝ドラの描き方を受け、「『おかん』と言っているのが川越の方言と思われているそうですが、生粋の川越人として初めて聞く言葉です」という視聴者からの声が投稿されていた。この文章から『つばさ』では「おかん」を方言ではなく、登場人物の性格をイメージさせるための言葉として使用されていたということがわかる。

さらに、同年の2009年に『おかん』という絵本が大日本図書から出版されている。この絵本では「おかん」という言葉以外にも文章全体で関西の方言が使用されていた。関西地方以外の幼い子どもたちが「おかん」という言葉を習得する環境もこの頃にはできていたことがわかる。また、この絵本と同じシリーズで『おとん』という絵本が前年に出版されている。しかし、絵本サイトの商品レビューは、『おとん』よりも『おかん』の方が多かった。このことからも「おとん」より「おかん」の方がなじみのある言葉となっている可能性が高いことがわかる。翌年の2010年には、佐賀県の看板猫に「おかん」という名前がつけられていた。この猫は、眼光が鋭い、気が強く、右耳は雄猫と喧嘩して負傷していることが特徴として紹介されていた。人間だけでなく、パワフルで気が強いという性質をもった動物にまで「おかん」という言葉が用いられていることからも「おかん」がキャラクター化していることがいえるだろう。

2012年には、病児保育サービスを手がける大阪市のNPO法人ノーベルが「働く‼おかん図鑑」を発行したことが紹介されている新聞記事があった。この本は、子どもが熱を出しても、会社を休めないときに6タイプの「おかん」の乗り切り方を紹介している。子どもを育てながら働くパワフルな女性たちが「おかん」と表現されている。また、「夫のできることを増やせば増やすほど、おかんの負担は減る」という文章からは、高校野球の記事に関して述べたときと同じく、「おかん」という言葉は「おとん」とセットで使用されていないことがわかる。そして、子どもが熱を出した際は父親よりも母親が優先的に動いている様子からは、「おかん」には、母親的役割も期待されていることがわかる。2014年に『おかんメール』という本を紹介している記事では、「『おかん』ということばの響き。母親のことを指す関西弁だが、ちょっと間が抜けていて愛らしく、たくましく、子供たちにたっぷりすぎるほどの愛情を注いでくれる存在。そういう愛らしいイメージがこの言葉にはある」（佐々木俊尚 2014：第3段落）と「おかん」という言葉がもつイメージについて言及されている。また、「懐かしい」というなんだか不思議な感情も湧き上がり、森進一の名曲「おふくろさん」を連想すると佐々木は述べている（佐々木 2014：第4段落）。この記事は「共同体は喪失し、帰るべき田園もなく、多くの人々が寄る辺もなくいきていかなければならない時代。そういう時だからこそいま、『おかん』は求められているのだ」（佐々木俊尚 2014：第5段落）という文章で締められている。湯澤規子は著書『「おふくろの味」幻想』（光文社新書）で以下のように述べている。

> 心理的な場所としての「おふくろ」という表象はすなわち、「母なるもの」あるいは「母性」への思慕である。例えば母なる大地、母なる海、母なる地球という表現も同様で、心理的に変える場所、あるいは懐深く受け入れてくれる場所を意味している。
>
> しかしこれは、「母」が優しくすべてを受け入れてくれるものであるという前提があって初めて成り立つ論理である。帰る場所は父ではなく、あくまでも「母」であると

いう点に注目すると、ジェンダーの問題と深く関わっているといえそうである。（湯澤2023：87-88）

佐々木の記事で「おかん」という言葉が「おふくろ」に言い換えられて表現されていたことから、「おかん」も「おふくろ」と同じように、必ずしもジェンダー規範から逸脱した存在とはみなされていないといえるだろう。

2016年には、大阪府の中高生が、ネットゲーム大手DeNAの協力で「おかんアプリ」を開発した。このアプリは、スマホ依存防止が目的に開発され、スマートフォンの使い過ぎを画面の中からヒョウ柄エプロンの怒ったお母さんが現れ通知するものである。そして、2022年には後ほど取り上げるおかん」アート展が東京で開催された。

以上のことから、「おかん」という言葉自体は「母親」という役割が重要視される前から存在していたといえる。しかし、明治時代に良妻賢母思想における母親像が規範とされると、「おかん」という言葉が使用されることは減少する。

その後、1970年代から漫才で「おかん」が使用されるようになり、2000年代以降には芸人が使用したことをきっかけに一般人からも「おかん」という言葉が全国で語られるようになったことがわかった。そして、1970年代以降から現代における「おかん」という言葉は、後ほど紹介する「おかんアート」という言葉がインターネット掲示板の「2ちゃんねる」で立ったスレッドのタイトルに使用されたのも2000年代初頭である。そして、「おかん」という言葉からイメージされるものが共通に認識され、キャラクター化されたことにより、関西の母親以外の人や動物、作品にまで「おかん」という言葉が使われるようになったことがわかった。

したがって、「おかん」という言葉から連想されるパワフルで世話焼きなどといったイメージは、真に伝統的なものではなく、「創られた伝統」（E.ボブズボウム）という概念にも通じるものがあるといえるのではないだろうか。実際、当初「おかん」という言葉は関西地方の一部の人々が使用する方言であった。さらに、明治時代には「母親」という言葉に変換されたことから、母親と互換性のある存在であった。しかし、1970年代頃からお笑いや新聞記事に登場する「おかん」は、一般的に語られる「母親像」とは異なるものであり、約40年の間に全国的に使用率が増加し、関西地方以外の人でも日常会話で使用される言葉として定着していったことがそれを示している。

第3章　メディアが表象する「おかん」像

前章では、「おかん」という言葉の拡がりと時代背景について明らかにした。「おかん」が「創られた伝統」であるとするならば、それは現代において具体的にどのように意味づけられ、イメージ化されているのかをメディアの表象分析から明らかにする。

3-1　父親の不在

大阪府出身の兄弟漫才コンビである「中川家」の漫才やあるあるネタの動画と、同じく大阪府出身のYouTuberである「うき本さんち」の東京と大阪の母親を比較した動画から「おかん」表象の分析をする。中川家は、YouTubeのチャンネルで多数の「おかん」に関する動画をあげている。実際に「おかん」と聞くと中川家の「おかん」を思い浮かべるという人は少な

くないのではないか。また、うき本さんちのYouTubeチャンネルは51万人（2024年1月現在）が登録しており、Tiktokでは34万人（2024年1月現在）が登録している。彼女の動画には「おかんあるある」動画以外にも、ほかのあるある動画や美容に関する動画などもあるが、なかでも「おかんあるある」動画の視聴回数が多い。Tiktokでは「おかんあるある」動画が2億回も再生されていた（2024年1月現在）。これらのことから、テレビや動画などで影響力のある人たちが描く「おかん」とはどのようなものなのかを分析する。表2と表3に中川家とうき本さんちの動画で「おかん」はどのように描かれているのかを、エピソードや会話の相手などに着目してまとめた。

「おかん」が登場するエピソードには、母親と子どもの関係を描いたものが多い。たとえば、先述した、全国的に「おかん」という言葉がポピュラーになったきっかけだと指摘されていたリリー・フランキーの小説の題名は、『東京タワー―オカンとボクと、時々、オトン』である。この題名からも「おとん」は時々でてくる存在であるといえる。絵本でも「おとん」よりも「おかん」の題名の方が読まれていることや、そもそも「おとん」という言葉は「おかん」よりも後になって登場したと考えられることも先述した通りである。

実際に、表2と表3の会話の相手の部分を見ると、16本の動画のうち、妻と夫のやり取りの場面を描いたのは1本だけである。その他の多くは、子どもとやり取りする場面での「おかん」が描かれている。そして、その際に父親が登場することはない。さらに、2022年12月21日に放送されたMBS毎日放送のバラエティ番組『やすとも・淳のクイズレ～若モンの意見は正解や！』では、「関西のおかんのあるあるセリフ イマドキママが“これ言うで～”はどれ?」という街頭アンケートがおこなわれた。1つ目は、子どもが悪いことや嘘をついた際、パトカーのサイレン音がしたときに言う「あんた迎えに来たで～」という言葉。2つ目は、落ち着きがない子どもに対して言う「ええ加減にしな吉本入れるで！」という発言。言うことを聞かない子どもに「あんたは拾ってきた子やからなぁ！」という3つの選択肢が用意されていた。この選択肢の中で20代、30代の関西の母親たちが子どもに対して発する言葉が調査された。アンケートの結果、「あんた迎えに来たで～」が子どもに最も言う言葉だったとされている。このアンケートの結果から、子どもが悪いことをした際、父親ではなく、警察官や吉本興業を怖い存在として脅していることがわかる。このことからも「父親の不在」を読み取ることができるのではないだろうか。

小山静子は、著書『良妻賢母という規範』（勁草書房）のなかで以下のように述べている。

> そもそも良妻賢母思想とは、「男は仕事、女は家庭」という、生産領域と再生産領域との分離、ならびに男と女という性による各々の領域の分担、この二点を前提として成立した思想であった。そして良妻賢母思想においては、男女は単なる生物学的相違だけでなく、心理的にも生理的にもそしてもちろん役割上も全く異なる対極的存在とされる一方で、形式上は男女は対等な存在とみなされていた。しかしそれは幻想でしかなく、実質的には女は男に比べて第二次的存在であった。（小山 2022：239）

良妻賢母思想において、女は男の第二次的存在であった。そして、今日、「良妻賢母」という言葉がさほど使われなくなっているとしても、「良妻賢母」という言葉に象徴される生き方が女たちに期待されている状況がなくなっているわけでもないし、女たちがそういう

表2　中川家の漫才における「おかん」の表象（筆者作成）

	エピソード	会話の相手	見た目、服装	URL
①	「パートから帰ってきたおかん」	息子	・パーマのかつら	https://x.gd/VQFs0
②	「オカン宣言」	息子	・パーマのかつら	https://x.gd/IU3N8
③	「おかんブルース」	息子	・パーマのかつら ・つっかけ ・花柄のシャツ、赤色のミモレ丈スカート	https://x.gd/G4U5O
④	「中川家ブルース おかん編2」	息子	・パーマのかつら ・つっかけ ・花柄のシャツ、赤色のミモレ丈スカート	https://x.gd/G4U5O
⑤	「喫茶店のおばちゃんとおばちゃん」	友達（関西のおかん）	1人目・パーマのかつら ・つっかけ ・水色のトップス、白色のスラックス 2人目・短髪のかつら ・つっかけ ・柄トップス、ミモレ丈のスカート	https://x.gd/JcpPA
⑥	「おばちゃんとおばちゃん」	友達（関西のおかん）	1人目・パーマのかつら ・つっかけ ・水色のトップス、白色のスラックス 2人目・短髪のかつら ・つっかけ ・ボーダーのトップス、ベージュ色のスラックス	https://x.gd/omJ6H

価値観を内面化することなく、自由に生きられているわけでもないのであると小山は言及している。一方で、「おかん」が表象される際は、そもそも「おとん」や父親が登場することが少ないのである。つまり、大阪の母親は夫の第二次的存在である母親像とは異なる表象のされ方をしているといえる。

また、表3の③の動画では、息子が学校で砂をかけられたというと、「やり返したんか？」と聞いて、砂をかけられた相手にかけ返さなかった息子に対して「ほんまあんただけは根性ないわ、ほんまに」と言って、息子に砂をかけた相手に「おかん」が復讐しようとするエピソードを描いている。おかんが父親である夫に電話をかけ、野球バットが家のどこにあるかを聞き、父親が野球バットの用途を聞くと、息子に砂をかけた友達を「かち割りに行く」と宣言する。この動画では父親が存在していることはわかるが、父親に頼むことはせず、おかんが自分自身で家庭外の問題を解決するイメージがあることが読み取れる。表2の⑤の動画は、喫茶店を営んでいるおばちゃんのところに、その友達が訪れて会話をしているネタである。このエピソードでは、夫婦で喫茶店を営んでいる設定であるが、夫は厨房にいるものの料理をつくることに専念しており、フロアには出てこないという発言があった。

田嶋陽子（2019）は、都会的で進歩的な夫の陰に隠れ、それを支える女性たちの存在を「お化け」と呼んだ。これを受け、村上由鶴（2023）は、一見、進歩し国際化した都市のなかでも、女性は男性の華やかな活躍を支える存在として、お化けのように陰に隠れている、そういう旧態依然とした進歩的ではない構造が温存されていると述べている。先に示した2本の動画の「おかん」像は、こうした「お化け」のような母親像とは対照的な描かれ方をしていることがわかる。

表3　うき本さんちの動画における「おかん」のエピソードと相手

	エピソード	会話の相手	URL
①	「息子が喧嘩して学校に呼び出された時のお母さん」	息子の担任、息子	https://x.gd/VzN90
②	「子どもがおもちゃの取り合いをした時」	ママ友、子ども2人	https://x.gd/VzN90
③	「息子が砂まみれで帰ってきた時」	息子、父親(電話)	https://x.gd/VzN90
④	「食事の呼び出し方」	息子	https://x.gd/VzN90
⑤	「子どもが遊戯に挟まった時」	息子、父親	https://x.gd/VzN90
⑥	「娘が熱を出して学校を休みたがった時」	娘	https://x.gd/VzN90
⑦	「子どもが怪我をした時」	ママ友、息子	https://x.gd/VzN90
⑧	「我が子がいじめられているのを知って学校に乗り込む親」	子どもの担任	https://x.gd/VzN90
⑨	「寝る報告を絶対してくるオカン」	息子	https://x.gd/JaVs1
⑩	「旦那が泥酔して帰ってきた時」	夫	https://x.gd/iCTUb

（筆者作成）

3-2　限定的な母親としてのおかん

3-2-1　女性と母性について

社会学者のオルナ・ドーナト（2022）によれば、かつての「良い母親像」には、聖母マリヤのような純粋さと無性愛の具現化が求められていたという。つまり、母親には無性愛という母性が備わっていることが要求されてきたといえる。そのため、「良き母」は、疑問や条件なしにわが子の一人ひとりを愛し、母であることに喜びを感じなければならない（オルナ・ドーナト 2022：68）。また、千田は母性イデオロギーとは、母親は子どもを愛するべきだ、また子どもにとって母親の愛情に勝るものはないという考え方のことだと説明している（千田 2013：42）。そしてこれらの母性規範は、2-1で先述したように、明治時代以降の子どもに関心が高まるとともに母性に対する意識も高まっていたという（千田 2013：43）。そこで本節では、メディアにおける「おかん」表象から、「おかん」の母性はどのように描かれているのかを明らかにする。

3-2-2　限定的母親としてのおかん

表2の②「オカン宣言」とは、おかんが寝る際に子どもに対して「お母さん、もう寝るからね」とわざわざドアを開けて一言声をかける場面が描かれていた。表3の⑨でも、「あんた明日何時に起きんの」「懇談会いつ言うたっけ」「お風呂沸いたからお風呂入りや」と何度も息子の部屋のドアを開けて用件を聞き、最後には「お母さんもう寝るよ」と報告する様子がネタにされていた。この「宣言」は、母親に何か言いたいことや相談したいことがある場合、「今のうちに言っておきなさい」という意味が含まれているのではいかと推察する。「おかん」は、365日24時間母親ではないという考えを持っていて、このことを子どもに伝えているといえるのではないだろうか。

それに加え、3-1で記したバラエティ番組内で紹介された「関西のおかんあるあるセリフ」の中に「あんたは拾ってきた子やからなぁ！」という言葉があった。この言葉は、先述した我が子に対する無性愛がある「良き母親像」の概念を自ら否定するものであるといえる。

これらのことから、「おかん」には、子どもに対する無性愛や母性は、常にあるものでは

ない、限定的で場面や状況によって変化するものであると自ら子どもに対して伝えるイメージを含んでいることが読み取れるのではないか。

また、夫に対しても役割は限定的なものであると示しているのではないか。表3の⑩のエピソードでは、夫が泥酔して帰ってきた場合のおかんが描かれている。この状況において、「どなたですか？」と夫にしらを切ったおかんに対し、夫は「パパです」と自称している。一方で、「おかん」は夫のことを「お前」や「あんた」と言っている。他にも夫に対し、怒っているときや責めている際は「パパ」や「お父さん」と呼んでいない。このことから、「おかん」は、夫や父親という役割に対しても、状況や感情によって変化するものとして捉えているのではないだろうか。

第4章　おかんの揺らぎ

前章では、「おかん」は第二次的存在ではないこと、状況や感情によって「変化する存在」であると描かれていることがわかった。そこで、本章では、「おかん」には具体的にどのような状況でどのような感情の変化が生じるのかを明らかにする。

4-1　「おかん」の両義性

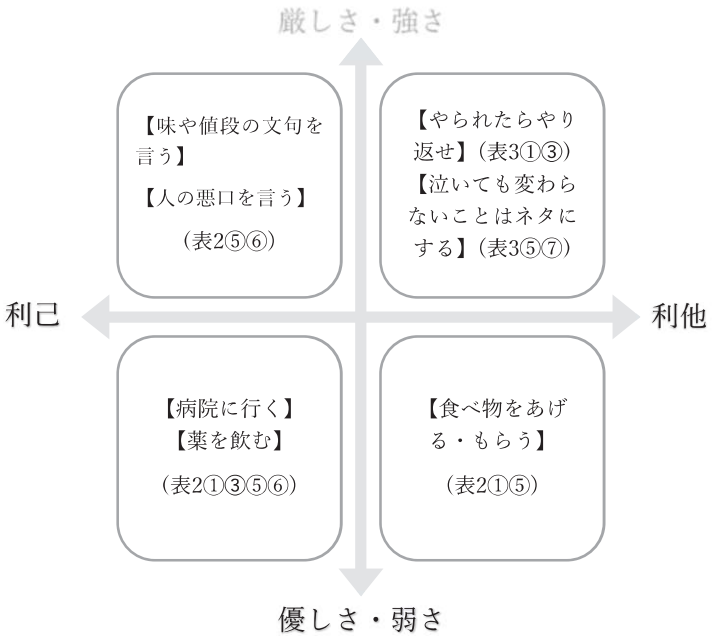

図2　「おかん」の両義性

（筆者作成）

表2と表3で扱ったエピソードで共通していた言葉や単語に注目し、図2にまとめた。その結果、動画内のおかんの発言や行動から、強さと弱さという両義性が読み取れた。また、利他的な要素と利己的な要素があることがわかった。実際に、整理した表をみると、すべての象限に当てはまるエピソードがあることがわかる。

表2の①の動画では、知人から食べ物をもらってきたことを話しているが、もらったコロッケに対して「そこのコロッケあんま美味しない」と発言した。表2の⑤の喫茶店でのお

ばちゃん同士の会話を再現した動画では、テレビに出ていた芸能人の悪口を言ったり、薬を飲むシーンや病院に行った話をしていた。最後には、人からもらったみかんを「全然美味しないけど、持って帰って」と言いながら友達に渡していた。表2の⑥のスーパーで繰り広げられるおばちゃんの会話を設定にした動画では、スーパーに売られている野菜が高いと文句を言ったり、足腰が弱くなったし、ボケてきたから病院行った方が良いと話をしている。表3の①と③の動画では、息子に嫌なことをされたら相手にやり返せと教え、おかん自身がやり返しに行くという発言がみられた。また、表3の⑤と⑦では、子どもが怪我をした際のおかんのエピソードが動画になっていたが、「泣いても変わらん」「怪我したことを」ネタにしていた。

オルナ・ドーナトは、アーリー・ラッセル・ホックシールドが「感情のルール」と呼ぶものと母親像に求められている感情とを結びつけて考えている。これは、「感情は与えられた社会的状況に適切であるかどうかに関するルール」であり、その見返りとして名誉、尊敬、需要と言った社会的報酬が頻繁に提供されるのである。そのため、母の感情は、子どもの行動や時間、空間、母にできる支援に応じて、一日の間にも長い年月の間にも、確実に変化する可能性があるにも関わらず、「良き母」として期待されるのは、すべての母が同じ感情を、一貫して持ち続けることであるという（オルナ・ドーナト 2022：68）。つまり、多くの母は一般的な存在であるために感情の規制を求められているが、一方で、「おかん」は上記のような両義性を持っていることから、状況や場面によって様々な発言や行動をしている存在だと表象されていることがいえる。このことから、メディアで表象されている「おかん」は母親規範を揺るがす存在なのではないかと考える。

4-2 「おかん」アートにおける両義性

2022年、東京都渋谷公園通りギャラリーで「Museum of Mom's Art ニッポン国おかんアート村」が開催された。本展覧会では「おかんアート」が取り上げられていた。「おかんアート」とは、神戸の下町の地域振興として、「おかん」がつくっているような、どこの家にでもある、身近な素材でつくられた手づくりの作品を指す言葉である。とくに本展では「おかん」を関西地方の方言における「母」という意味に限定せず、広く性別を越えて「おかん」的感覚を持ったつくり手による作品を紹介している。本展覧会会場のエントランスを入ってすぐの展示室では、円柱状に「おかんアート」が並べられた「おかんアートタワー」が来場者を迎える。この部屋では「おかんアート」の持つ「抜け感」や、一点一点を仔細に見ていると湧き上がってくるインパクトなど、「おかんアート」の持つ魅力がプレゼンテーションルームのように表現されている。このことから、「抜け感」や「インパクト」といった要素が「おかん」的感覚であると捉えられているといえる。

上記の展覧会に対し、山崎明子（2023）は、「おかんアート」として抽出されていたものは、簡易で、拙く、迷信や笑い、そして懐かしさを感じさせるもので、展示のなかではそれらを「おかん」という呼び名により「愛すべきもの」と読み取らせていると指摘している。その場に刺繍やキルトが一切無いことから、女性たちが「おかんアート」的なものを経て、さらにその先で切り開いた自己表現の世界とそれまでに蓄積された技術や時間をこの場では消されている。女性が作るものを幼げで拙いものととらえ、それのみを好ましいものとして語る、その姿勢にミソジニーを感じざるを得ないと山崎は批評している。また、男性批評

家が女性写真家の作品を一応は褒めているが、「女の子は直感的」「女の子は技術的に未熟」という褒め方に終始していたことも指摘されている（長島 2020，村上 2023）。そして、このことは女性写真家を下位・周縁クラスにとどめおき、写真業界においてあくまで異物として扱う「よそ者化」そのものだったといえると村上は指摘している。

これらのことから、幼さや拙さが魅力であるとされる「おかんアート」から、「おかん」はこれまで語られてきた女性像と重なる部分も持ち合わせているといえる。また、その重なる部分というのは、権威的で強い存在として表象されているメディアの「おかん」とは矛盾するイメージでもある。つまり、「おかん」とはこれまで語られてきた母親像と同じ要素と相反する要素との両方を持ち合わせた両義的な存在としても捉えることができる。

4-3 「おかん食堂」における両義性

大阪市中央区に「おかん食堂」というメニューを持たない定食屋がある。メニューをもたないというのは、選べるメニューはなく、その日に「おかん」が作った料理だけを食べられるということである。店主は同店をはじめるきっかけは、おせっかいだと語る。息子のシェアハウスで若者の晩ご飯がコンビニや買ってきたものばかりだと衝撃を受けたことからだと話している。そしてお店をアメリカ村という若者の街にオープンした理由については、「食生活が乱れがちな若い人がたくさんいる街で、お手伝いをしたいんです。少しでも役に立ちたい」と話している。食堂内は、店主が大ファンだという西城秀樹のポスターや写真がぎっしり並び、時にはライブの上映もしているというおかんの趣味全開である。メニューについても食べられる料理は1日30食限定の「今日のごはん」のみで、魚の煮付け定食や唐揚げ定食、酢豚定食などさまざまな料理を提供している。それに対して、「思いついたものを作っているだけです」と発言している（Lmaga.jp 2021）。

これらのことから、「おかん食堂」は料理をつくる、子ども世代のお手伝いをしたい、少しでも役に立ちたいという利他的な行為や気持ちが理由で店を営んでいる一方で、趣味全開の店内や気まぐれのメニューという利己的な要素もあり、利他と利己の両義性があることがわかる。

4-4 ステレオタイプのおかんに変化する

先述したおかんの揺らぎは、服装からも読み取れるのではないかと考える。表4にまとめた中川家の漫才では必ずパーマのかつらを被っていた。中川家のほかの漫才で、服装も用意している際は、柄のトップスを身につけ、つっかけを履くなどステレオタイプな「おかん」が表象されているといえる。

しかし、表2の⑥の漫才の途中で、中川家が演じている「おかん」より若い、知り合いの母親に会うシーンがある。そのシーンで、若い母親に向かって「相変わらず綺麗やないの。腕なんか出して」という台詞がある。この台詞と中川家の服装は長袖であることから、年齢によって「おかん」の服装が異なることがわかる。また、表3の動画では、母親の服装は東京も大阪も同じものを着ている。これは、YouTuberのうき本さんちが演じているおかんが、中川家の演じるおかんよりも若いからなのではないか。台詞から中川家の演じる「おかん」の子どもは、中学生以上の息子や娘がいる設定であることが推測される。一方で、YouTuberが演じる「おかん」の子どもは小学生や小学生以下であることが推察される。

これらのことから、「おかん」は子どもが生まれ、母親になったと同時にステレオタイプのおかんになるのではなく、子どもと共にステレオタイプのおかんに成長するものであるといえる。

第5章　おかんと関西の文化「型くずし」

第4章でのメディア表象の分析から、「おかん」は一般的な母親像とは異なる存在として表象されている一方で、重なる部分もある存在であることがわかり、「おかん」の表象には、両義性があるといえる。しかしながら、多くの人がイメージする「おかん」は、前者の影響を受けているものだと言える。そして、そのようなイメージは関西の文化と密接にかかわっていると考えられる。そこで、本章では「おかん」のイメージを生み出す関西や大阪の文化について考察したい。

近藤弥生子（2022）の著書『台湾はおばちゃんで回ってる?!』では、母親が台湾で子育てをしている間に日本で身に付けていた「呪縛」から解き放たれていく様子を綴っている。

> 今の幸せがあるのは、間違いなく夫と子どもたちのおかげだ。だが、台湾で暮らすことによって、私が長年植え付けられていた呪縛から解放されたのも、少なからず影響しているように感じている。「人に迷惑をかけてはならない」とか「女性は男性を立てるべき」といった価値観は、私が日本で暮らしていたころが自然とまとっていたけれど、台湾では必要ではないから脱ぎ捨てることができたものだ。（近藤 2022：6-7）

つまり、母親の規範は環境や文化によって異なり、その規範や価値観は住んでいる人に影響を与える可能性が高いといえる。このことから、「おかん」のイメージ形成には、大阪の文化や環境が影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

5-1　大阪の地域文化

千田稔（1996）は、水上瀧太郎の著書『大阪』（1983）で大阪の車夫は、型に拘泥しない実利的な駆方だったという文章から、型に拘泥しないということは大阪をとらえる一つの視点になると指摘している。また、祖父江孝男『県民性』（1971）の中で、大阪出身の大宅壮一が「もうかりまっか」という言葉が日常の挨拶になっているとしていることから、生活や性格の隅々にまで、金銭第一主義が浸透している。他地方の人は、大阪と言えば、すぐさまガメツイ、ドケチと思い浮かべるくらいである。また、同じく大阪出身の宮本又次によれば、大阪人には合理主義があるという。大阪人の好む言葉に「これは値ぶちがある」というのがあるが、払った金と等価であったかをすぐ考えるのであって、あちこち歩きまわって買い物をし、「値ぶちのあるもの」を掘りだすのが大阪人の趣味なのだ。したがってひとつのものを買うにもいたるところを歩きまわる。また、大阪人は、官制や法律よりも、人と人との関係を重要視している。それは、義理や人情を基調とした大阪文学からも読み取れる。そして、この地域文化は「型からの自由」である捉えることができる。以上のような評論や文学作品を読み取り、千田は大阪を「型くずし」ととらえられないかと仮説を提示している。

このことから、大阪人の特徴だと述べられているものが「おかん」の描かれ方に重なる部

分があることがわかる。しかし、現在は「大阪人」から、「おかん」の特徴へと変化しているのではないかと推察する。これは、買い物や家計管理は「母親」がするものだという時代背景の変化の表れではないかと考える。

5-2 「ええかげん」論

湯沢規子（2023）によれば、料理研究家の土井善晴は著書『一汁一菜でよいという提案』（2016）で多くの人に支持されたという。そして、この著書の読者は複雑になりすぎた食事や料理からシンプルな発想に立ち戻ることができたと述べてられている。つまり、具だくさんの味噌汁とご飯という「一汁一菜」の提案を聞いて、若者、特に若い女性たちが安心し、明るい表情になったことが印象的であったというのである。そして、こうした土井のシンプルな料理案には大阪の「ええかげん」という言葉が関係していると述べている。

> 私は大阪生まれですが、大阪の言葉には、今でも知恵がたくさんあると感じています。大阪の言葉に限りませんが、土地の言葉は、その土地とつながった、地に足が着いた言葉なんですね。子どもの頃は、「ええかげんにしなさい」言うて、よう大人に叱られました。「ええかげん」とは、昨日と今日は違うやろということです。「アホの一つ覚え」言うて、同じことばかりしてたらいけません。ちゃんと自分で考えて、どこまでが良くて、どこからが悪いかを、状況に応じて自分で判断できなあかんと言うてるわけです。昨日と今日は違います。この世は、ものともの、人と人、ものと人、自然と人、全て関係の間で変化するのです。いつもいろんなことを感じたり、思ったりするでしょう。それが情緒です。自分で直観的にどうするかを感じなさい。いくら考えてもわかることじゃないし、教えられることじゃない。「ドントシンク、フィール！（考えるな、感じろ！）」って、ブルース・リーが言うてたやつです。料理もそうですね。自分を信じて料理できたらいい。（聖教新聞 2023：第2段落）

このように、大阪の言葉が人の考えや言動に影響を与えていることがわかる。とくに上記で言及されていた「ええかげん」という言葉とそれと共に語られたエピソードは、先述した「おかん」の「揺らぎ」や規範から外れるといったことにもつながるのではないかと考える。

古田徹也（2021）は、日本語であれ、あるいは別の言語であれ、子どもが母語を学ぶことは、それぞれの言語が息づく文化の伝統的なイメージないしは物事の見方を学ぶことを伴うのだと言及している。このことからも、大阪弁や「おかん」という言葉が大阪の文化を継承しているといえるのではないだろうか。つまり、大阪の言葉が関西の母親たちの言動に影響を与えている可能性が高いのではないかと推察する。

第6章　人々が語る「おかん」像

これまでの章で、「おかん」の語源や言葉の歴史を辿り、使われ方が変化しながら広がっていったことが明らかになった。さらに、その背景には時代や社会との関係、メディアや一般人から語られるイメージの影響があることがわかった。それから、現代において「おかん」がどのようにイメージ化されているのかをメディアの表象分析をした結果、「おかん」は

一般的な母親像と重なる部分と相反する部分の両義性を持ち合わせている存在として捉えられていた。そして、「おかん」独自の要素というのは関西の文化や方言といった環境も関係しているのでないかということがわかった。

本章では、「おかん」や関西の文化について実際の関西地方の母親たちはどのように認識しているのかについて、以下の5名の母親へのインタビュー結果をもとに検討する。

表4　調査協力者の一覧

	年齢	出身地	子どもの年齢	調査日
A	60代	奈良県	娘1人、息子1人 （ともに30代）	2022年8月20日
B	50代	和歌山県	娘2人（大学生） 息子1人（高校生）	2023年9月21日
C	40代	大阪府	娘1人（1歳）	2023年11月26日
D	40代	愛媛県→大阪府 （大学生から）	息子2人 （中学1年生、小学4年生）	2023年11月29日
E	60代	大阪府	息子3人（20代と30代） 娘1人（大学生）	2023年12月4日

（筆者作成）

6-1　加えられる「おかん」像

「おかん」と聞いてどのようなイメージがあるのか、そして、その抱いている「おかん」のイメージはどこからきているのかの話を聞いた。

Bさん

関西のおばちゃん。うーん、でも、和歌山出身だけど。関西というよりかはとくに大阪のイメージかな。ヒョウ柄の服着て、飴ちゃん持って、声が大きくて。（そのイメージは）テレビかな。お笑い系のテレビ。吉本新喜劇とか。まわりにはいなかった。

Cさん

ぱっとでもおかんって言われたら自分の母親かな。それかもうほんまに自分の親とか結構もっと年齢層高めの人があーなんかそのうちの母親とかももう70歳、69歳やけど、こう自転車でどこまででも行くとか、今でも。どこまででもないけど、近隣のこの何曜はこのスーパーが安いからってスーパー行って。カーブスに行って、そこで友達作ってそこで話してその帰りに今日は近商が安いからって近商行って翌日はここ行ってっていうのを自転車で永遠と行って。自分が中学とかの時はおかんと思ってたかな。自分の母親のことは。呼んではないけど。

大阪のおばちゃんっていうのもイメージする。（そのイメージは）テレビかな。大阪に住んでてそういう人を街中で見かけたりもするけど、なんかもうそれは大阪に住んでるのにも関わらずテレビの印象が強いかな。

Dさん
見た目のイメージでドーンみたいな、ついてきやみたいな、心もドッシリみたいな。漫画とかドラマとかそういうなんか実在する誰かがいてあの人がとかじゃなくてたぶんなんか描かれているものやと思います。

Eさん
面倒みの良いお母さんやねんなぁとか、子どもたちの友達からも慕われているようなお母さんやねんなぁっていうイメージがするんですよ。

これらの発言から、関西の人でも「おかん」と聞いて第3章で分析したような漫才やバラエティ番組などのメディアで描かれているものを思い浮かべているといえる。しかし、より具体的な言動や「おかん」と聞いて抱く感情の理由について話を聞いていくと、Cさん以外もまわりにいる人たちをイメージしているということを、Bさん、Dさん、Eさんの語りを手掛かりに考えたい。

Bさん
自分の母も和歌山（出身）だけど、和歌山の人って感じで、おかんではなかった。でも、大阪に住んでたときマンションに住んでて、上の世代の人はおかんだった。自転車に乗って雨の日は自転車に傘立てて。夏は日傘。かごに荷物いっぱいで。雨の日はレインコートか合羽着て。（今の年齢で）60から70代くらいかな。まわりには（おかんのような人がいる）イメージはないかな。和歌山（にいた時）も。

Dさん
（まわりでは）大阪のお母さんみたいなイメージで問われて思い浮かんだ人が2人パパっといて、どーん母ちゃんやでみたいな。保育園の時もなんかでも、別に大阪の人じゃなかったと思うけど、どっしり構えてて、関東から来たって聞いたようなそうなんですけど、なんかイメージでお母ちゃんみたいなかんじで言うとやっぱりなんかこうコミュニケーションがすごいなんかできてて、何々しようみたいな、保育園のママ友同士のイベントとかでも私とかはついていくだけなんだけど、みんな巻き込んで何々しようって言って物事を進めてくれるっていうか、コミュニケーション能力が高いなとか、なんかすぐ人とこうわーってつながってたりとかするような、なんか作っていくみたいな、仲間を。なんかそんな感じの人がおかんって私は思います。（そして、そういう能力を）スキルとして持ってるというよりかは、自然とできるのがおかんっぽいなと思う。でも、私の思ってるおかん旦那のお母さんかもしれへん。

Eさん
うち基本的におかんは嫌いなんですね。おかんと言われるのが一番嫌なんです。まだ、おばはーんって言われる方がマシです。うーん、なんでやろうな。なんで嫌なんかな、なんかやっぱり、バリバリの根っから大阪が好きじゃないからかな。だから嫌やなぁと思う。人がおかんとは言うてんのは全然いいんですよ。自分が言われたらめちゃくちゃいや。（ま

わりでは）職場の人は言ってはりますね、そんなん見てるから嫌なんかもしれん、下品やなぁと思ってしまうのはそのせいかもしれん。

特にＥさんは、実際に自分の子どもから「おかん」と呼ばれているが、自身は「おかん」と呼ばれることが嫌だと答えた。「おかん」と聞いてイメージするものや周りの人が言っていることに関しては何も思わないが、自分が呼ばれるのが嫌だと思う原因には、職場の人たちが「おかん」と呼んでいるのを見ているからかもしれないと解釈している。つまり、「おかん」という言葉のイメージに、自分の周りで「おかん」と呼んでいる人や呼ばれている人のイメージを重ねているといえるのではないだろうか。

同様に、Ｂさんは最初、自分のまわりにはおかんのような人はいないと発言していたが、地域や世代によっては、おかんのような人が実際にいることに気づいた。また、Ｄさんも最初はメディアで描かれているイメージを答えてくれたが、まわりの人たちに「おかん」だと思う人がいるかを尋ねると、関西出身ではない母親でも「おかん」だと感じる人がいることがわかった。そして、街中や身の回りにいるおかんのような人の特徴には、コミュニケーション能力が高く、パワフルさがあるという点をあげている。それらの特徴は、第3章で分析した動画で会話の設定が多く、相手に対して厳しさや強さを感じさせる言動がみられたという知見に通ずるものがある。また、関西出身以外の母親のことを「おかん」だと感じたことから、2-5でも述べたように、「おかん」はメディアによってある種キャラクターのようなものになったといえるのではないだろうか。

つまり、メディアで表象される「おかん」の特徴と街中や身の回りにいる「おかん」的な人との乖離はなく、実体験に基づく語りにおいては、さらに具体的な言動や性格が加えられていく。また、話しながら「おかん」に対して抱くイメージが変化していくＢさんとＣさんの語りを紹介する。

Ｂさん
自分では「おかん」という意識はないかな。おかんってやっぱり強いイメージがあるから。

―それはあえて取り入れていない感じですか？
なりたくない、うん。

―それはなぜですか？
外見はヒョウ柄で…あんまり憧れない。内面的には動じない。芯を持ってる。強いイメージ。まわりの意見に流されない。自分の意見をしっかり持ってる。それは羨ましい。なれたらなぁと思う。内面的には憧れる。見た目はヒョウ柄とかそういうイメージなので。深くふかく追求していくとまわりに流されないけど、あつかましいイメージもある。

Ｃさん
おばちゃんやなって言ったら、やっぱ典型的なちょっと小太りのめっちゃ派手な服で、安いもん大好きでみたいな。逆にみんなそう思ってると思うから、うちの母親も大阪のおばちゃんやわって、でもあんな見た目ではないけどってやっぱちょっと言いたくなる。なん

かそういうのを大阪のおばちゃんと言われたら想像するから、ちょっとうちの母はそんな感じではないけど、行動とか話してる内容を聞く限りはもう大阪のおばちゃんっていう。

これらのように、外見と内面に対して異なる感情を抱いている。外見に対しては否定的な意見を持っていて憧れてはいない。一方で、内面の部分では憧れや愛らしさを感じていることがわかる。このことから、関西の母親は「おかん」に対して、憧れの対象である部分とそうでない部分の両義性を持ち合わせている存在として認識しているのではないだろうか。

6-2　関係から生まれる「おかん」

インタビューに協力してくれた人で、自分自身を明確に「おかん」だと自認している人はいなかった。しかし、子どもから「おかん」と呼ばれていると答えたEさんの語りを引用する。

Eさん
（子どもからは）お母さんと呼ばれたり、時にはおかんと言われたり、おばはんと言われたりします。（小さい頃は）娘だけがママって言ってました。他はお母さんでしたね。男子たちは高校生ぐらいからなんかおかんとか言い出したかなぁ。で、娘はお兄ちゃんたちの真似しておかんとかいうときあるなぁ。（おかんと）呼んで欲しくないけど、しゃーないと思って受け入れてるんですよ、優しいから。

Eさんは子どもから「おかん」と呼ばれることもあるが、自分から呼び方を指定したのではなく、子ども自身から呼び方を変えたことがわかる。つまり、「おかん」とは自らなるものではなく、他者から貼られるレッテルのひとつであることがわかる。しかし、それを受け入れるか否かは「おかん」自身で決めることができる部分があるといえる。そして、「おかん」を受け入れる理由としてほかにどのようなものがあるのだろうか。Dさんへのインタビュー後に、追加でメールでの質問をした際の回答を引用する。

Dさん
私は、「おかん」歓迎です（笑）
そう呼ばれるようになったら、「おかん」なんだ～と思うようになり、自分の「おかん」像に近づく言動になるかも！？です。
「ママ」って、甘ったれてる心の現れのような気がしていて、おっさんが「ママ」とか言っていたらちょっと気持ち悪くないですか？
長男が最近時々「お母さん」って言うことがあり、もしかしたら外では私のことを「ママ」と呼ばなくなってきたのかも？と思っているところです。
成長の一過程だと思いますので、わが子の成長を楽しむ一つの材料が、呼ばれ方の変化だと思っています。（原文ママ）

このようにDさんも呼び方が変化するのは子どもの成長の一過程であると認識している。そして、母親である自分自身もイメージする「おかん」像に変化するのではないかと考えて

いる。そして、Dさんは「おかん」が1つの母親像であり、自分の言動に影響を及ぼすものだと捉えている。落合（2022）によれば、現在では主婦向けの雑誌は即物的な生活情報雑誌に徹する方向で、あるべき主婦像のビジュアルな表象化や、価値的・情緒的文章表現は抑える傾向にある。現実に主婦は、いる。しかしその生活形態は多様化しており、ひとくくりにした主婦像を示せるだけの実態も規範性も、もはや存在しないのだろうと言及されている。しかし、Dさんの発言から「おかん」は母親像のモデルの1つであり、自分がどのような母親であるかを解釈するための準拠集団（R.K.マートン 1961）なのではないかと考える。

また、Eさんは夫からも「おかん」と呼ばれていることに対して「それが腹立つことにおかんとか言うんですよ。失礼でしょ。あの人のおかんちゃうのに」と答えていた。このことから、「おかん」というものは子どもと母親との関係性のみで生じるものだと考えていることがわかる。筆者は、本研究において現実の関西の母親たちは、メディアが表象しているステレオタイプの「おかん」によって役割を取得し、役割演技をしているのではないかという仮説を立てた。しかし、「おかん」とはそもそも「役割」ではなく、「関係」として捉えられているのではないか。オルナ・ドーナトは、母であることが「役割」ではなく、個々の主体間の「関係」として認識すれば母が子どもや母としての自分について同一の感情をもっているという期待を捨てることができると指摘している。関西の母親は、「母親」というものをどのように捉えているのだろうか。Aさんの語りを手掛かりに考察したい。

Aさん
―理想の母親像はありますか
そうやなぁ。理想はなぁ。…理想やなぁ。難しいんよな。それは。優しいだけじゃあかんしなぁ。でてけぇえへんなぁ。なんでやろう。理想なぁ。理想通りにいくことないと思うからあんまり理想って考え方ことないなぁ。そんときの感情もね、親もあるし。

このようにAさんは母親というものにも感情があるという前提で話している。このことからも関西の母親は「おかん」を子どもとの「関係」であると捉えているのだと推察される。また、「おかん」というものには、子どもとの関係だけでなく、地域との関係もあるのではないかと考えているEさんの語りを引用する。

Eさん
大阪でもさ。やっぱりね、大阪の北の方はハイソサエティな人が多いイメージがあって、北エリアではおかんという言葉は聞いたことがないんですよ。私も大阪の北摂（北）と中川津（真ん中）と泉州（南）と住んだことがあるからね。泉州に来てからかな、ようおかんおかんって聞くのは。泉州はまぁ「だんじり」があるから縦も横とも繋がってるから、団結してはるね。町内会で子どもたちの面倒みてはるね。地域のみんなを大事にするような。他人の子どもたちも大事やで～っていうのはミナミの方が多いかな。基本はどの人も（他人の子どもも大事だと）思ってはるやろうけど、その度合いが違うかなと思う。

このようにEさんは「おかん」の存在は「だんじり」という地域文化が関係しているのでは

ないかと解釈している。つまり、「おかん」とは「役割」ではなく、子どもや地域との「関係」によって生じるものであると考えられる。

6-3　慣習化された「おかん」

先述したように、インタビューで「おかん」を自認している人はいなかったが、筆者がインタビューをした際にメディアで表象されている「おかん」の要素と重なる部分があるのではと感じる言動がみられた。このことから、無意識のうちに「おかん」文化が継承され、慣習化されているのではないかと推察した。

2022年11月10日に放送された読売テレビのテレビ番組『秘密のケンミンSHOW極』では、大阪の母親の口ぐせとして「明日のパン」という言葉が紹介されていた。この言葉は、朝からご飯や味噌汁をつくるのは面倒くさいため、朝食用のパンをスーパーで買って帰る時に使用するという。そこで、関西の母親たちは実際にこの言葉を使用し、朝食はパンにしているのかを聞いた。

Bさん
うん、朝は食パン。娘が物心ついたときからトースト。ご飯だとちょっと、え、今日ご飯なの？みたいな。パンが置いていないと不安。（スーパーとかで）「明日のパン」とか言わなくても当たり前。確かに楽だからという理由もあるけど、日常だから。自分も子供の時、朝はパンだった。祖父と祖母も朝はパン。朝は早く済ます。パンだったらそのままで良いというのも確かにあるかも。

このように、テレビでインタビューを受けた人たちが言っていた「面倒くさいから」などという理由が見えなくなっていることがわかる。テレビでインタビューを受けていた女性たちは、Bさんよりも上の世代である印象を受けた。このことから、ある世代からは「おかん」的な行動が慣習のひとつとして受け継がれ、当たり前になっているのではないだろうか。そして、それは良妻賢母規範のように、学校や国から教育されるものではなく、家庭や自分の身の回りの人から無意識に学んでいるといえるのではないか。

Cさん
飴を配ったりはしないけど、話しかけたりするようにはなるかもしれない。コミュニケーション的には大阪のおばちゃんになっていくんかなと。そういう地域にいるから、まわりのもやし、自分も親もやし、それはメディアで言われてる大阪のおかんに自分から寄っていこうとは多分なれへんから、やっぱりそれは実際の人たちの影響かなと。

Cさんは、インタビューが終わり、プリンを出す際に「これだけですみません、しかもあの下のコンビニのなんですよ、めっちゃ値段も書いてるけど」と言っていた。元値がどうとかいうのがおかんのイメージと言っていた本人は自覚せずに、「おかん」と認識している自分の母と同じような発言している。これらのことから、おかん的言動は「ハビトゥス」の一種であるといえるのではないか。ハビトゥスとは、社会学者P. ブルデューの著書『ディスタンクシオン』の中で、その階級における特有の習慣、行動様式のことであると論じている。

ただし、ブルデューは「階級における」と定義しているが、おかん的言動は地域文化によるものがメディアによって再生産された結果だと考える。

つまり、関西の女性たちは親やまわりの母親たちから「おかん」的な言動、つまり、型にはまらない方法を無意識のうちに学んでいるのであって、自ら「おかん」を取り入れ、役割演技をしている意識はないのではないかと考える。

第7章　おわりに

本稿では、関西の母親に着目し、「おかん」とは何か、これまで語られてきた母親像とは異なるイメージを抱くのはなぜかという問いを、「おかん」という言葉の歴史やメディア表象、地域文化との関わり、そして当事者の語りを通じて検討してきた。

最初に、母親と「おかん」の歴史を紐解いた。「おかん」という言葉は、「家族」や「母親」の概念が入ってきた明治以前から存在していたことがわかった。また、「おとん」という男性の存在を意味する言葉と対をなしていないものであるということがわかった。

つまり、「おかん」という言葉は、語源において「母親」とは異なる要素をもった存在であることが明らかになった。一方で、明治時代に「母親」という新たな役割が生まれた以降、女性の間での呼び方が「おかん」から「お母ちゃん」に変化したのだとすると、「おかん」と「母親」には互換性があるのではないかと推論した。

その後、1970年代頃から「おかん」という言葉は、お笑いの道具として再登場した。その際、これまでの母親像とは異なる独自のイメージが創出された。それから、関西の子どもたちを中心に一般人からも「おかん」という言葉が使用され、全国的に広まった。また、このように地域や方言の場から離れて「おかん」という言葉が日常会話で使用される言葉として定着したのは、メディアの影響に加え、フェミニズム運動が活発化していた時代状況によるものではないかと考える。これらのことから、現代の私たちが「おかん」と聞いてイメージするものは「創られた伝統」なのではないかと考えられる。

そして、「おかん」が「創られた伝統」であるとするならば、それは現代において具体的にどのように意味づけられ、イメージ化されているのかをメディアの表象分析から明らかにした。その結果、「おかん」はこれまで語られてきた母親像とは異なる存在として描かれていることが明らかになった。

たとえば、「おかん」が出てくるエピソードに夫である父親が登場しないことから、良妻賢母像や夫の第二次的存在とは異なる表象のされ方をしていることがわかった。また、母親に期待されている母性も状況や場面によって変化することから、「おかん」というのは変化する役割だと捉えられているといえる。また、「おかん」という存在自体が子どもと共に成長し、変化していくものであることがわかった。つまり、メディアは「おかん」を社会的に理想とされている女性像とは異なる存在として表象していることが明らかになった。

一方で、「おかん」には様々な両義性が存在し、一般的な母親像と重なる部分と相反する部分の両義性も持ち合わせている存在として捉えられていた。このような「おかん」独自の要素というのは関西の文化や方言がもつ要素と重なる部分があることから、地域文化や環境も関係しているのでないか。このことから、人々は関西の母親に対してステレオタイプ的なイメージを抱いており、メディアが現実の母親を誇張して表象することで、人々が関西の母親に抱くイメージを再生産しているといえる。

以上のことから、「おかん」とはこれまで語られてきた「母親」とは異なるオルタナティブな存在であり、それは関西の地域文化、メディア、フェミニズムの3つの要素の共振によって生み出されたものだといえる。

また、インタビューから、実際の関西の母親たちは、メディアの「おかん」をあえて取り入れ、役割演技をしているわけではなかった。そもそも「おかん」というものは役割で終わるものではなく、それぞれの関係性で生じるものであることがわかった。自分自身の言動の要所に「おかん」のようなものがあると自覚している人もいたが、それは、社会的に教育されたものではなく、自分自身の母親や周りにいる母親から自然に学び、慣習の一部であるハビトゥスとして身についたものであった。

これらのことから、本論文では、「母親」とは社会の制度や規範によってつくられるだけでなく、地域文化やメディアによってもつくられうるという知見を見出すことができたのではないだろうか。

そして、地域文化やメディアによって創出された「おかん」像は、現代の母親や女性たちのモデルの1つになりうるのではないかと考える。筆者自身、大学入学を機に関西地方に住んでから、静かなカフェでパートの同僚たちの悪口が周囲の人たちに筒抜けに耳に入っていることなど気にせず楽しんでいる「おかん」たちや、一人暮らしをしている筆者に対しわが子のように心配してくれる「おかん」など、何事にも一所懸命で自分の軸をしっかりと持っている「おかん」たちに出会い、筆者にとって「おかん」は憧れの対象になってきた。そんな「おかん」たちの哲学や考え方を知りたいと思ったのが本研究の始まりであった。先述したように、現代では価値観の多様化と共に母親像も多様化している。しかし、それによって、自分がどのような母親になればいいかの指針がなくなったともいえる。その中で「おかん」という母親像は、1人の人間としての主体性と母親という役割を同時に求められる現代の女性たちの1つのモデルになるのではないか。そして、少し大げさかもしれないが「おかん」に憧れた母親が増え、「おかん」が単なる関西の文化ではなく、全国化し、主流になっていく可能性もあるのではないかと考える。

しかしながら、筆者は本研究をおこなう前まで「おかん」は母親規範とは対照的な存在であると思っていたが、本研究を通して「おかん」には母親役割も期待されていることがわかった。一般的な母親は尚更そうである。「期待」というと良いものに思えるが、ときにはそれが「負担」になることもあるだろう。現代社会において、「良妻賢母」という言葉の使用頻度は減っているものの、2023年に世界経済フォーラムが発表したジェンダーギャップ指数によると、日本は146か国中125位であり、過去最低順位を記録した。インタビューに協力してくれた人の話を聞くと、それぞれが母親としてだけではなく、1人の人として生きる工夫や考え方を持っていたが、こうした個人の努力に委ねるだけでなく、社会全体として女性が生きやすい環境をさらに整えていく必要がある。そして、本研究で明らかになったように、母親像は、時代や社会制度だけではなく、メディアや地域文化によってもつくられる可能性があるのだとすれば、自分にも何かができそうな気がしてくる。そこで今後は、女性たちや母親たちが生きやすい社会をつくっていくために、筆者も社会に出て、メディアや地域社会に主体的に関わり、より実践的な活動や発信を通して女性や母親たちの生き方について考え続けたい。

参考文献

美術手帖編集部，2022，「1000点を超える『おかんアート』でその世界を紹介。東京都渋谷公園通りギャラリーの『ニッポン国おかんアート村』に注目」美術手帖，（2023年12月31日取得，https://bijutsutecho.com/magazine/news/report/25118）
土井善晴，2016，『一汁一菜でよいという提案』グラフィック社
E.ボブズボウム，テレンスレンジャー編，1983=1992，前川啓治・梶原景昭他訳『創られた伝統』紀伊国屋書店
A.ゴッフマン，1974，石黒毅訳『役割と演技:日常生活における自己呈示』誠信書房
古田徹也，2021，『いつもの言葉を哲学する』朝日新書
今田絵里香，2019，『「少年」「少女」の誕生』ミネルヴァ書房
川原千夏子，2008，「帰省先は甲子園 酒田南、半数以上が大阪出身」『朝日新聞』，2008年8月8日，夕刊，14面
近藤弥生子，2022，『台湾はおばちゃんで回ってる?!』大和書房
ことば研究館，2021，「広がる関西弁～国語研の調査データを使ってみよう～」鑓水兼貴，（2023年12月31日取得，https://kotobaken.jp/digest/09/d-09-04/）
小山静子，2022，『良妻賢母という規範』勁草書房
Lmaga.jp，2021，「アメ村『おかん食堂』、メニューを持たない定食屋のワケとは」（2023年12月31日取得，https://www.lmaga.jp/about/）
松本修，2010，『「お笑い」日本語革命』新潮社
MBS毎日放送，2022，「やすとも・淳のクイズレ」MBS毎日放送，（2023年12月31日取得，https://www.mbs.jp/quizure/）
村上由鶴，2023，『アートとフェミニズムは誰のもの？』光文社新書
長島有里枝，2020，『「僕ら」の「女の子写真」から わたしたちのガーリーフォトへ』大福書林
NHK，2023，「NHKスペシャル ミヤコ蝶々 76歳の勝負」NHKホームページ，（2023年12月31日取得，https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0009010439_00000）
落合恵美子，2022，『近代家族とフェミニズム』勁草書房
Orna Donath，2016 = 2022，鹿田昌美訳『母親になって後悔してる』新潮社
P.ブルデュー，1990，石井洋二郎訳『『ディスタンクシオン（上下）：社会的判断力批判』藤原書店
佐村多賀雄，2001，『おかんはおかんや―最後の巨星ミヤコ蝶々』浪速社
澤村美幸，2023，『方言と日本のこころ』NHK出版
聖教新聞，2023，「台所は、地球とつながっている―料理研究家　土井善晴さんに聞く㊦」聖教新聞ホームページ，（2023年12月31日取得，https://www.seikyoonline.com/article/8CB5277698E0898446C6D89BC8F89D19）
千田稔，1996，「関西を考える」ヨーゼフ・クライナー編『地域性からみた日本』新曜社，249-270
千田有紀・中西祐子・青山薫著，2013，『ジェンダー論をつかむ』有斐閣
田嶋陽子，2019，『愛という名の支配』新潮社
山崎明子，2022，「『おかんアート』が不可視化しているものとは何か。『Museum of Mom's Art ニッポン国おかんアート村』レビュー」Tokyo Art Beat，（2023年12月31日取得，

https://www.tokyoartbeat.com/articles/-/okan-art-2022-03-07）
読売テレビ，2022,「秘密のケンミンSHOW極」読売テレビ，（2023年12月31日取得，
https://www.ytv.co.jp/kenmin_show/）
湯澤規子，2023,『「おふくろの味」幻想』光文社新書